

Title	[浦添関係文献紹介] 『仲西村の沿革誌』(増補本) 外間太和著
Author(s)	長間, 安彦
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(7): 55-55
Issue Date	1996-03-29
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/20627
Rights	浦添市立図書館

『仲西村の沿革誌』（増補本）外間 太和 著

仲西村は、『おもろさうし』や『琉球国由来記』『琉球国旧記』などの近世史料に記される村名で、浦添のなかでも古い村落のひとつに数えられる。前記の史料は1623から1731年の間の事項が記録されるが、この時点では「仲西村」は「中西」が宛字されている。その後の史料では、現在の「仲西」と表記された。

さらに、首里王府修史の『球陽』によると、1767年に小湾川沿いの居住区が風水見立てのうえで、悪い所なので、村域の外間門原に移動したことが述べられている。以後、仲西村の中心地として、現在に至る。

外間氏は明治33年に仲西で生まれ、大正13年に上阪し、約60年近く県外で生活された方である。『仲西村の沿革誌』は、前記の史料などに記録される拝所と神女による祭祀儀礼のことを拾い挙げ、さらに、著者自身の大正13年頃までの青年期の記憶を基に、帰沖後の聞き取りを文献資料との比較を行いながら、年中行事や伝説、仲西出身の人物伝、戦前・戦後の仲西の民俗習慣などをも述べている。著者自身の「仲西村の文化誌」として纏められている。

著者の外間氏がこの本を刊行する（1989年発行）以前、86年頃に当時の文化課浦添市史編集室に原稿（大学ノート）を持参し、コピーの提供がなされたことがある。編集室での刊行を意図したが諸々の事情で頓挫してしまい、結果的には外間氏個人による出版となってしまった。

1989年8月に発行された初版本（110ページ・A5判）と、同年10月発行の増補本（118ページ）とは、その内容に大きな違いがあるわけではない。後者により多くの写真・スケッチ画が挿入され、項目名の変更、文章の一部削除、さらに新しく別立てされた項目などが数カ所あるだけである。情報としては当然に増補本がすこし豊かになっている。

現在、浦添市における字誌や自分史づくりは、それほど盛んではない。掲げるに、『内間字誌』（1981

年）・『なかま誌』（1991年）・『牧港字誌』（1995年）・『小湾字誌』（1995年）・『島やかりゆし』（1984年）を数えるのみである。本書同様に、自費による字（部落）誌刊行に、字城間の民俗をまとめた『島やかりゆし』がある。他は編集委員会が字自治会で組織、予算が組まれ多くの執筆者陣を抱えての出版である。本書刊行の経緯を考えると、字や市当局の消極的な対応が悔やまれる。浦添市の民俗調査の際、本書発行以前にそのコピー資料が、大いに活かされたことはいうまでもない。

沿革誌の内容概略は次のとおりである。

①村の成り立ち ②各所祭祀 ③葬祭 ④年中行事 ⑤仲西にかかわる人物評伝 ⑥伝説・わらべ歌などである。

特に注目される記述は各所祭祀である。その中で興味がひかれるのが「仲西の殿小」の挿絵である。解説によると稲麦四祭（ウマチー）の前日に殿小（トゥングラー）の香炉の前に青竹を2本東西に離し立て、その間に注連縄を張ってあった、と記録している。民俗地理学者・仲松弥秀氏によると、ティダ（太陽）ガ穴を象ったアーチ門で、神々はこの門を通過して村人の前に出現するのであるという。仲間・前田両村の浦添城内の殿前でのウマチーを執り行なう前日も同様な門が作られ、ノロ（祝女）らによって拝みがなされたことが、伝承されている（『浦添市史』）。明治25年頃の雨乞行事では、仲西ノロ殿内の神アサギ・庭でウステーク（臼小太鼓）を打ちながら、「雨乞のおもろ」を詠唱していたことや、かつて八月十五夜に「北の松金」なる組踊りが仲西の村芝居で演じられ、その脚本を太和氏の父が保管していたこと、さらに人物評伝では、又吉喜戸と宮古島人頭税廃止運動に関わった中村十作との交流談などが列記される。

聞き取りや体験を軸に、80歳あまりの古老お一人による1部落についての諸々の記述とはいえ、本書は浦添市の歴史・民俗を知り得る貴重な文献となっている。

初版本・増補本ともに浦添市立図書館沖縄学研究室に所蔵。
〈長間安彦〉